

朝鮮前期の儒教経書口訣とその教育史的意義

東国大学校 教授 朴 鐘培 著
獨協大学 教授 川村 肇 訳

The Gugyeol of Confucian Classics in the Early Joseon Period and its Educational Significance

Park, Jong-Bae Dongguk University
Translated by KAWAMURA Hajime

朴鍾培 (パク・ゾンベ 박종배)

ソウル大学校、ソウル大学校大学院教育学科を経て、2003年、博士学位取得。2008年から東国大学校師範大学（教育学科）教授。

本論文は、教育史学会『教育史学研究』第29集第2号（2019年11月、57-89頁）に掲載された。

I. 序文

儒教経書の韓国語解釈は、概ね口訣、釈義、諺解の三階層からなっている¹。「諺解」が諺文を道具として、漢文原典を韓国語に全部翻訳するものだとすれば、「釈義」は特定の句・節に韓国語解釈をするという点で、漢文原典の部分翻訳だということができる²。これに比して、「口訣」は漢文原文を句と節に分けて区切り、そこに韓国語の「吐」を付けて、文章成分を表示する作業である³。口訣は経書を韓国語に解釈し、教え・学ぶために、どうしても経ずにはいられない重要な過程である。星湖李瀾が「我が国の音が中華とは全く違うので、音吐と諺釈がなければ、学者たちは往々誤謬を免れなかった」⁴と言った

1 李昡昊、ハン・ヨンギョ (한영규) 「朝鮮中期経書諺解の成立とその意味」韓国陽明学会『陽明学』第32号、283頁、2012年。

2 退溪李滉『四書釈義』と『三経釈義』が代表的事例である。

ことや、順庵安鼎福が「だいたい、我が国の言葉は中国と違っているために、文義と訓解を韓国語に解釈することによってのみ、これを教えることができる」⁵と言ったことが、この点をよく物語っている。この間、儒教経書の口訣については、言語学（国語学）⁶・思想史学⁷はもちろん、書誌学⁸・翻訳学⁹分野でも多くの研究が行われてきた。しかし、口訣なくしては、経書の学習と教育、そしてそれに対する評価¹⁰を想像すらできないのだから、教育史分野でも口訣への関心を持たねばならないだろう。

日本の占領期の1923年に、儒教經典講究所で四書五経の諺釈、つまり韓国語翻訳を押し進めながら整理した「諺解の来歴」で明らかにされているように¹¹、儒教経書の韓国語解釈は新羅の薛聡（655-?）によって始められた。より正確に言えば、それまで口頭で行われていた解釈を、薛聡が初めて文字化したのである¹²。薛聡が儒教経書の韓国語解釈を文字化した方法が、すなわち借字表記法の一つである、釈読口訣であった¹³。1443年のハングル創製は、経書に対す

-
- 3 「吐」は孤立語である中国語を土台とする漢文を、韓国語に解釈して読むため、漢文の句読処に付する韓国語の助詞や語尾である。一部では、口訣を「吐」と同一視することもあるが、口訣は漢文に「吐」を付け、韓国語式に読む方法という点で、「吐」と区別する必要がある。朴鍾培「薛聡の釈読口訣と韓国古代の儒学教育」韓国教育史学会『韓国教育史学』第40巻第3号、2018年、参照。
 - 4 「記蓋」〈周易校正廳宣醞圖記〉（『星湖全集』第53巻所収）に「我東方音、與中華絕異、若無音吐諺釋、學者或不免往往舛錯」とある。
 - 5 「雑書」〈前輩著述〉（『順庵集』第13巻所収）に「蓋東俗言語與中國異、故其文義訓解、必以方言釋之、然後可以教習矣」とある。
 - 6 安秉禧「諺解の史的考察」韓国古典翻訳院『民族文化』11集、1985年。同「世祖の経書口訣について」ソウル大学校奎章閣韓国学研究院『奎章閣』7号、1983年。同「中世語の口訣記事資料について」『奎章閣』1号、1976年。イ・ヨンギョン（이영경）「七書の諺解とその国語史的意義」韓国国学振興院『国学研究』19、2011年、等参照。
 - 7 金恒洙「16世紀経書諺解の思想史的考察」『奎章閣』10号、1987年、等参照。
 - 8 オク・ヨンジョン（옥영정）「17世紀刊行四書諺解についての総合的研究」書誌学会『書誌学研究』32集、2005年、等参照。
 - 9 張景俊「釈読口訣の翻訳史的意義についての試論」韓国翻訳学会『翻訳学研究』12巻4号、2011年。キム・ジョンウ（김종우）「史説、郷札、口訣は翻訳なのか」韓国通翻訳教育学会『通翻訳教育研究』2008年、等参照。
 - 10 日講、句講、月講、春秋考講のような学校試験や、科学の講書試験で、句讀と訓釋の正確性を評価する時、その物差しとなるのが「口訣」だといいうる。
 - 11 前掲朴鍾培論文、158頁参照。
 - 12 前掲安秉禧論文（1985年）、9頁。

る韓国語解釈の文字化に一大革命をもたらした。つまり経書の原文に口訣を付ける水準を超え、ハングルを通して原文全体を、韓国語に完全に移す諺解が可能になったのである。

しかしながら、儒教経書、特に四書三経の韓国語解釈は、1443年のハングル創製以後、150年ほど経った後で完成した。簡単にその過程を整理してみると、儒教の経書類の中で最初に諺解、つまり韓国語に翻訳されたのは、中宗15(1518)年に刊行された『翻訳小学』であった。以後、宣祖の時に校正庁が設置され、『小学』を原文に忠実な形に再度翻訳した『小学諺解』(1587年)が刊行され、それに続き1590年に『中庸諺解』、『大学諺解』、『論語諺解』、『孟子諺解』など、四書諺解が刊行された。そして1592年、壬辰倭乱(文禄・慶長の役)の勃発で、原稿が遺失したため、三経諺解は倭乱が終わった後、再び校正庁を設置して、1606年に『周易諺解』を、そして1613年に『詩経諺解』を、最後に『書伝諺解』を刊行することで、ようやく完成した。このようにして、いわゆる官本七書諺解ができ上がった。仏教書が既に15世紀中に大挙して注解まで翻訳されて出版されたのとは異なり¹⁴、儒教経書は、これより百年をはるかに過ぎてやっと大文の韓国語翻訳を仕上げたのだった。このように儒教経書類の諺解が遅れた理由の中の一つは、儒学者たちの儒教経書に対する理解が仏教書ほどに成熟していなかったことが挙げられる¹⁵。実際、15世紀までは『四書大全』と『五経大全』、『性理大全』等の大全本に対する儒学者たちの理解水準がそこまで精密ではなく、朝鮮初期の儒教経書理解水準は、解釈一つにも、さまざまな異説が出される程度に過ぎなかったと評価されている¹⁶。

以下、本論文では、朝鮮前期に行われた儒教経書の口訣を、大きく、1) 高麗末・朝鮮初期の鄭夢周(1337-1392)と、権近(1352-1409)の経書口訣、2) 世宗治世(1418-1450)の『小学』および四書口訣と諺解、3) 世祖治世(1455-

13 前掲朴鐘培論文、参照。

14 例えば『釋譜詳節』(1447年)を始めとして、これを改編した『月印釋譜』(1459年、世祖5年)、『楞嚴經諺解』(1462年)、『法華經諺解』(1463年)、『永嘉集諺解』、『阿彌陀經諺解』、『金剛經諺解』、『心經諺解』(以上、1464年)、『圓覺經諺解』(1465年)、『牧牛子修心訣諺解』、『四法語諺解』(以上、1467年)などが刊經都監を通して相次いで出版された。

15 前掲安秉禧論文(1985年)、22頁参照。

16 全在東「四書大全の受容とその意味」東洋芸学会『東洋芸学』第20集、109頁、2008年、参照。

1468)の『小学』および四書五経口訣、4)柳崇祖(1452-1512)の七書諺解に分けて調べてみようと思う¹⁷。高麗末、性理学導入以後から、李滉(1501-1570)と李珥(1536-1584)が性理学の観点からの韓国語解釈を完成させるまで、100余年の間、絶えず続けられた儒教経書口訣の歴史は、それ自体が儒学(性理学)に対する理解の水準を高め、これを基礎にして、当時の教育を真の性理学の時代に入らせようと努力してきた過程であった。口訣を定め、修正してきた歴史は、儒学(性理学)を研究し、教育してきた歴史と切っても切れない関係にある。それぞれの時期別の儒教経書の口訣作業に対しては、先行研究と関連資料を通して、その背景と目的、主体、進行過程などを詳細に整理してみようと思う。これとともに、一部人士たちの口訣反対、または批判意見も検討してみようと思う。口訣は、当時の儒教経書学習と、教育の前提条件といえるほどの重要な意義を持っていたが、口訣がもってきた学習の利便性と効果の裏面に存在する、もう一つの問題についても調べてみようと思う。

II. 朝鮮前期の儒教経書口訣

1. 高麗末朝鮮初期の鄭夢周と権近の経書口訣

いわゆる訓詁・詞章学時代の儒学の韓国語解釈は、薛聡によって初めて完成され、数百年間、その権威が認められてきた¹⁸。しかしながら、高麗末に我が国に朱子学(性理学)が導入されると、儒教経書に新しい観点からの解釈が必要になった。この時、新しい儒学の観点で、儒教経書に韓国語の解釈、つまり口訣を初めて試みたのは、鄭夢周(1337-1392)だったように思われる。朝鮮初期に徐居正(1420-1488)が書いた崔恒(1409-1474)の碑文の中に、経書に鄭夢周の口訣があったと言及があり¹⁹、王が礼曹に鄭夢周の『詩経』口訣を求めよと命じたという世祖11年の実録の記事があることから見て²⁰、鄭夢周が儒教経書に口訣をつけたことが分かる。恭愍王16(1367)年に、鄭夢周が礼曹正

17 この区分は、1923年に儒教経典講究所で四書五経の韓国語翻訳を押し進めながら整理した「諺解の来歴」に従っている。

18 前掲朴鍾培論文、参照。

19 「碑誌類」〈崔文靖公碑銘[并序]〉『四佳文集補遺』1巻に「光陵嘗嘆、東方學者、語音不正、句讀不明、雖有權近鄭夢周口訣、訛謬尙多、腐儒俗士、傳訛承誤」とある(下線は引用者)。

20 『世祖実録』世祖11年11月12日丙辰の記事に「令禮曹、廣求本國先儒所定四書五経口訣、與鄭夢周詩口訣」とある。

郎として成均博士を兼務しながら、該博な知識をもって『朱子集注』を講義し、「我が国性理学の祖宗」と尊敬された事実に関する『高麗史』『列伝』の記録を通して²¹、儒教経書に新しい観点の口訣が鄭夢周によって付けられた蓋然性を垣間見ることができる。様々な状況から見て、鄭夢周の経書口訣は、世祖年間（1455-1468）までは残って伝えられたものと見られるが、今はすべて散逸して伝えられていない²²。

鄭夢周の次に経書口訣に乗り出したのは、権近（1352-1409）である。権近が太宗の命を受け、経書口訣作業を行ったという事実は、『世宗実録』の次の記事でも確認できる。

王が卞季良に言うには「昔、太宗から権近に命じて、五経に吐（およそ読書する時に韓国語の節句として読むことを世間では吐という）をつけろと指示し、権近が辞退したが、許可をえられず、ついに『詩経』、『書経』、『易経』の吐を付けた。ただ『礼記』と四書には吐がない。私は、後学たちがことによると本来の意味もよく知らず、多くの生徒たちを教えるのではないかと心配だ。万が一これをもって教えるなら、どうあっても有益でないはずはない」と言う。季良が答えて言うには「権近もむしろ辞退しましたが、私のような小臣がどうしてそれをできましようか。四書は臣が幼い頃に学びましたが、『礼記』は学びませんでした。また四書は文章がこまごましていて意味も旁通し、一つに判断して決めることはできません。先儒も言うには「『礼記』は漢の儒者たちが、焼け残りを拾い集めたので言葉が詳しくないことが多い」と言ったこともあり、考定することが難しいようです」と言うと、王が言うには「そうだとでもだ」と²³。

上記の記事によれば、太宗治世（1401-1418）、権近は王の命令で五経に口訣

21 「鄭夢周」（『列伝』『高麗史』30巻）に「16（1367）年には、礼曹正郎として、成均博士を兼ねた。当時、経書で我が国にやって来たのは、唯一『朱子集注』だけだった。鄭夢周の講説が流暢で際立っており、他の人々の考えを凌駕したものであったので、それを聞く人々は、いかにも不審に思った。後に、胡炳文の『四書通』を得た後、それと合致しないところがなかったので、多くの儒学者たちが一層敬服した。李穡が彼をよく称賛して言うには「鄭夢周が理学を論じる時は理にかなったものになり、一つも理にかなっていないことはない」としながら、「我が国性理学の東方理学の祖」だと尊敬した」とある。

22 前掲安秉禧論文（1983年）、2頁。

を付け、『詩』、『書』、『易』の三経については実際に口訣を完成させたようだ。良く知られているように『入学図説』と『五経浅見録』の著者権近は、太宗が「国の宝・儒林の師表」と称賛した²⁴ 当代最高の学者だった。これによると太宗の治世に推進された経書口訣は、当然権近を中心に行われる他はなかったようだ。

現在、鄭夢周と権近によって行われた口訣が伝わらないため、それがどのような形で行われたのかが確認できない。例えば、漢文の語順をそのままにして、句読処に韓国語助詞や語尾のような機能語を付し、その順序で読む順読口訣であるのか、韓国語語順に従い、漢文を逆読、つまり遡りながら、原文の漢字の意味を解釈して読む積読口訣であるのかは明らかではない²⁵。大概積読口訣はハングル創製以後、諺解が活発に行われるようになると、徐々に消えていくが、音読口訣は、漢文学習の必要性があるため、現在まで引き続き使われている²⁶。このような状況を見ると、鄭夢周と権近の経書口訣は、全て積読と順読の両方の可能性があるが、順読の可能性が少し高いと言える。一つ明らかなのは、鄭夢周や権近の経書は、全てまだ「訓民正音」という我々の文字が創製される前に行われたため、借字のやり方で文字化したという点である。もちろん訓民正音創製以後も、正字や略字の形の口訣字で、口訣を表示した跡が依然として残っている（【図1】参照）²⁷。

23 『世宗実録』世宗10年閏4月18日己亥の記事に「上語卞季良曰、昔太宗命權近著五經吐〔凡讀書、以諺語節句讀者、俗謂之吐〕、近讓之不得、遂著詩、書、易吐、唯禮記、四書無之、予慮後學、或失本意、以訓諸生、若因此而教、豈不有益、季良對曰、近尙讓之、況小臣乎、四書、臣於幼時學之、禮記則本不學、且禮記文多瑣屑、而意亦旁通、不可執一以定、先儒亦言、禮記、漢儒掇拾煨燼之餘、語多未詳、似難考定。上曰然」とある。

24 『世宗実録』太宗9年4月2日甲戌の記事に「陽村、國家珍寶、儒林師範」とある。

25 口訣のより多様な方式は、張景俊「積読口訣の翻訳史的意義についての試論」韓国翻訳学会『翻訳学研究』12巻4号、2011年、参照。

26 鄭在永、アン・デヒョン(안대원)、ハ・ジョンズ(하정수)「朝鮮初期積読口訣の発見とその意味」口訣学会『口訣学会学術大会発表論文集』、2016年。この発表文章では円覚寺所蔵『法華経』1-3巻と、4-7巻、『楞嚴経』1・2巻等の朝鮮初期積読口訣資料を紹介している。

27 原典の行間に、口訣を墨書きで書いておく場合は、諺文より既存の口訣字を書くことが簡便だったと見られる。



【図1】心經附注の口訣記写²⁸

鄭夢周と権近によって行われた経書口訣は、四書五經に性理学の観点からの新しい解釈という長い旅の出発点に当たる。鄭夢周が韓国語性理学の祖宗といわれ、権近が当代最高の経学者だったとしても、彼らの性理学についての理解は、まだ大きく制限された範囲の中でなされざるを得なかった。退溪と栗谷の時代になって、「朝鮮性理学」と言えるほどの高い境地まで上り詰めるには、まだ行かねばならない道のりは遠かった。鄭夢周と権近を継いで、世宗治世以後、絶えず行われた儒教経書への口訣及び諺解作業は、その道に残された痕跡である。

28 安秉禧「中世語の口訣記写資料について」ソウル大学校奎章閣『奎章閣』1、1976年、56頁の写真を転載。写真を詳しく見てみると、「帝曰人心隱(은)惟危爲古(하고)道心隱(은)惟微爲尼(하니)」と読めるように借字方式の口訣表記になっていることが分かる。隱は、口訣字の「ㄱ」で、為は「ㄴ」、古は「로」、尼は「히」という表記になっている。この『心經附注』は、日本の蓬左文庫所蔵本で、1549年、文科に合格し光州牧使を歴任、1573年に死去した辛璉の手沢本が、壬辰倭乱の時に日本に渡ったものだという。これによって推定される口訣記写年代の上限は、16世紀中葉である。

2. 世宗治世の『小学』及び四書口訣

先に世宗10年、王が権近の例を引いて、卞季良と四書五經に「吐」を付ける問題を相談した記事を見た²⁹。世宗10年に進めたかったこの經書口訣は、一旦保留となった。それからもう一度作業が開始されたのは、世宗28（1446）年のハンゲル創製後である。これに関して、実録の記事を見ると、次のようにある。

尙州牧使金鉤を召し出したが、金鉤が尙州牧使になって半年にもならないときだった。このころ、集賢殿から王命を受け、諺解で四書を翻訳していたが、直提学金汝が主管した。金汝が死んで、集賢殿から金鉤を推薦したため、特別に召し出したのである³⁰。

この記事によれば、1448年3月以前、ある時点から集賢殿の学士たちは王命を受けて、金汝（?-1448）を中心に、四書を諺解していた。しかし金汝が突然死んでしまって、彼の代わりに尙州牧使金鉤（1383-1462）が四書諺解の責任を負うことになったのだ。金鉤は經史に広く通じており、特に性理学に精通していて、金末（1383-1464）・金泮（?-?）とともに、成均館で後進の教育に専念し、当代「經學三金」または「館中三金」と呼ばれた人物である³¹。

世宗30（1448）年ころ、王が金汝、金鉤らに儒教經書諺解作業を命じた事実は、次に掲げる徐居正が記した崔恒の碑銘で確認できる。

世宗王から金汝と金鉤及び公（崔恒）等に『小學』と四書五經の口訣を定めるよう命じた。私（徐居正）も後に合流したが、毎度多くの学者が異見に対して講論するのを見ると、公の意見が最も優れており、皆その意見に従った³²。

徐居正が記した碑銘の内容は、実録の記事と若干違いがある。まず、世宗30年を前後した經書諺解作業の対象テキスト問題だが、実録では四書だけが言及

29 注23、参照。

30 『世宗実録』世宗30年3月28日癸丑の記事に「驛召尙州[牧]使金鉤、鉤爲尙州未半年、時集賢殿奉教、以諺文譯四書、直提學金汝主之、汝死、集賢殿薦鉤、故特召之」とある。

31 「金鉤」「金末」「金泮」の各項目『韓國民族文化大百科辞典』参照。

32 「碑誌類」〈崔文靖公碑銘[并序]〉『四佳文集補遺』1卷に「英陵命臣金汝金鉤及公等、定小學四書五經口訣、居正亦與其後、每見諸君講論同異、公議論發越諸君、咸推讓之」とある。

されているが、碑銘では『小学』と四書五経を対象にしたと記している。『小学』が太宗治世、権近によって確立された「小学先講の原則」に従い、当時儒学教育の最も基本となるテキストとして強調された点で、『小学』への諺解も進められた可能性が高い。そして、実録では集賢殿に「四書を諺文で翻訳せよ（以諺文訳四書）」としたと記しているが、碑銘では、王が「『小学』と四書五経の口訣を定めるように（定小学四書五経口訣）」命じたと記している。次の違いは、金汶・金鉤などが行った作業を、実録は「諺解」とし、碑銘では「口訣」としていることである。この点は「口訣」が「諺解」の前段階または諺解に至る段階の一つということを考えれば、互いに相反する話ではないことが分かる³³。最後に、崔恒の役割に関する問題だが、実録では彼についての言及がないが、碑銘では彼の役割は大変大きかったとされている。この点については、碑銘を書いた徐居正と崔恒の関係³⁴という側面から理解することもできるが、崔恒が朴彭年・申叔舟・成三問らと訓民正音創製に参加し、以後、『韻会』のハンゲル翻訳はもちろん、『龍飛御天歌』、『東国正韻』、『訓民正音解例』などの撰進で重要な役割を担ったことから見ると、崔恒が実際に重要な役割を果たした可能性が高い。

しかし、このように王の命で金汶、金鉤、崔恒など、当代の優れた学者たちが参加して進められた口訣及び諺解作業は、少なくとも世宗治世には結実を見ないまま終わったように見える。当初「諺解」を目標に始められた作業は、「口訣」を進める過程で中断した可能性が大きいようだ。口訣および諺解作業を進めたという記録が残っているだけで、その結果を刊行した記録は見当たらないからだ³⁵。

33 諺解の最初の出発点は「口訣」である。これは世祖治世に行われた仏教諺解で確認できる。1461年に刊行された『楞嚴經諺解』を例に見てみると、諺解の過程は、「①漢文原文に口訣を付ける（世祖）、②口訣を確認する（慧覚尊者信眉）、③唱準、つまり口訣を音を出して読みながら、校定する（貞嬪韓氏など）、④訓民正音で翻訳する（韓繼禧、金守温）、⑤相考、つまり正音翻訳を多くの人が比較考察する（朴建、尹弼商、盧思慎、鄭孝常）、⑥例を定める（永順君の父）、⑦国韻、つまり東国正音の音で漢字音を付ける（曹燮安、趙祉）、⑧翻訳を修正する（信眉、四肢、学悦、学祖）、⑨王が見て、翻訳を確定する（世祖）、⑩御前で翻訳を声を出して読む（曹豆大）」のような過程を経る。キム・ムボン（召早号）「朝鮮前期諺解事業の現況と社会文化的意義」東岳語文学会『東岳語文学』第58集、18-20頁、2012年、参照。

34 崔恒は徐居正の姉兄（義兄）である。

35 前掲安秉禧論文、3頁。

3. 世祖治世の『小学』および四書五経口訣

世宗治世で未完の課題に終わった儒教経諸口訣および諺解作業は、世祖治世で再び始められ、ついに結実を見た。良く知られているように、世祖は刊經都監を設置し、様々な仏典諺解書を刊行した。一部の仏典は、世祖自身が直接口訣を付けたり、諺解した³⁶。しかし世祖は、仏典諺解にのみ注力したのではない。世祖は、1461年に崔恒などに蠶書を諺解させ³⁷、翌年には申叔舟（1417-1475）らに、武経、つまり兵書に口訣を定め、注釈を校定させた³⁸。儒学の振興のため世祖は、1458（世祖4）年10月、金鈞と崔恒、韓繼禧（1423-1482）らに、『初学字会』という漢字学習書に、ハングルの注解をつけて刊行させたことがある。そして晩年には、『周易』を始めとする儒教経書の口訣に念を入れた。世祖が進めた儒教経書口訣は、徐居正が建てた崔恒の碑銘に次のように書かれている。

王は、かつて我が国の学ぶ者たちが、語音が正しくなく、句読に暗く、たとえ権近と鄭夢周の口訣があっても、過ちが多くて腐った儒者や俗になったソンビたちが過ちを互いに受け継いでいくことを残念に思い、鄭麟趾、申叔舟、丘從直、金禮蒙、韓繼禧、公（崔恒）、本人（徐居正）らに四書五経を配り、古今を考証して口訣を定めるよう命じた³⁹。

世祖治世に展開されたこの経諸口訣作業について、実録の記事は世祖11（1465）年9月に初めて現れる。世宗30（1448）年を前後して、進められた『小学』と四書五経の口訣作業が結実せず、中断していたが、この時再び始められたのだ。『実録』の記事には次のようにある。

36 前掲安秉禧論文、4頁。

37 『世祖実録』世祖7年3月14日乙卯の記事に「命知中樞院事崔恒、右承旨韓繼禧等文臣三十餘人、用諺字譯蠶書」とある。

38 『世祖実録』世祖8年10月21日壬午の記事に「御思政殿、召諸將、設酌、示御製武経序、……今更與申叔舟、權擧、崔恒、宋處寬、洪應等定口訣、命校註、庶育英才、收功四方云爾」とある。

39 『四佳文集補遺』1巻「碑誌類」〈崔文靖公碑銘[并序]〉に「光陵嘗嘆、東方學者、語音不正、句讀不明、雖有權近鄭夢周口訣、訛謬尙多、腐儒俗士、傳訛承誤、遂命臣鄭麟趾、申叔舟、丘從直、金禮蒙、韓繼禧及公與臣居正等、分授五經四書、考古證今、定口訣以進」とある。

夕べ、丕顯閣にお出ましになり、成均司藝鄭自英、直講柳希益、吏曹判書韓繼禧、戸曹判書盧思愼、吏曹參判姜希孟を召して、『周易』の口訣について、夜更けまで論じた⁴⁰。

丕顯閣⁴¹で鄭自英、柳希益、韓繼禧、盧思愼、姜希孟と『周易』の口訣について論じたことを始めとして世祖は、その年の10月6日（成均司藝鄭自英、直講丘從直・柳希益、注簿兪鎭）⁴²、10月9日（鄭蘭宗ほか16人と、柳允謙ほか16人）⁴³、10月11日（盧思愼、兪鎭、朴始亨、金紐）⁴⁴、10月15日（大君、王子君）、10月21日（鄭自英、丘從直、兪希益）⁴⁵、11月1日（鄭蘭宗ほか）⁴⁶、11月15日（兼藝文儒臣）⁴⁷、11月24日（鄭昌孫ほか）⁴⁸、11月25日（兼藝文儒臣ほか）⁴⁹、12月17日（兼藝文儒臣ほか）⁵⁰、12月23日（兼藝文儒臣ほか）⁵¹、12月24日（兼藝

40 『世祖実録』世祖11年9月庚午の記事に「夕御丕顯閣、召成均司藝鄭自英、直講柳希益、吏曹判書韓繼禧、戸曹判書盧思愼、吏曹參判姜希孟、論周易口訣、夜分乃罷」とある。

41 丕顯閣は、思政殿の東側の角にある内廂庫2間に窓を作り、気楽に滞在する場所とした場所で、「丕顯閣」という名前を付けたのは、『書経』の「味爽丕顯」から、その意味をとっている（「思政殿東隅内廂庫二間置窓闌、以爲燕居之所、賜名曰丕顯閣、取書味爽丕顯之義也）。『世祖実録』世祖9年11月8日壬戌の記事の中の「丕顯閣」注釈参照のこと。

42 『世祖実録』世祖11年10月6日庚申の条に「命吏兵曹堂上郎官、皆入御前銓注、召成均館司藝鄭自英、直講丘從直兪希益、注簿兪鎭、命皆就前、論易、傳曰、四人精曉義理、吾欲寵遇、以勸諸儒、予觀易傳、程傳甚通、朱傳或疑、朱不及程大遠、予故以程傳定口訣、使人將御定口訣、互相論辨」とある。

43 『世祖実録』世祖11年10月9日癸未の条に「以兼藝文鄭蘭宗、柳洵、金季昌、鄭孝常、金紐、朴始亨、李瓊全、裴孟厚、崔自濱、趙祉、李益培、成晋、兪鎭、李則、孫昭、崔漢良、成倪爲左、柳允謙、魚世謙、魚世恭、權季禧、柳文通、李孟賢、洪貴達、李淑城、李封、鄭徽、李承寧、閔粹、崔淑精、孫比長、李陸、許譔、朴孝元爲右、御定周易口訣、與先儒陽村權近口訣異處、粘標分授左右、每於殿講日、論難是非」とある。

44 『世祖実録』世祖11年10月11日乙酉の条に「御勤政殿門、……又命戸曹判書盧思愼率兵曹佐郎兪鎭、戸曹佐郎朴始亨・金紐、齋周易口訣、與宰樞論難」とある。

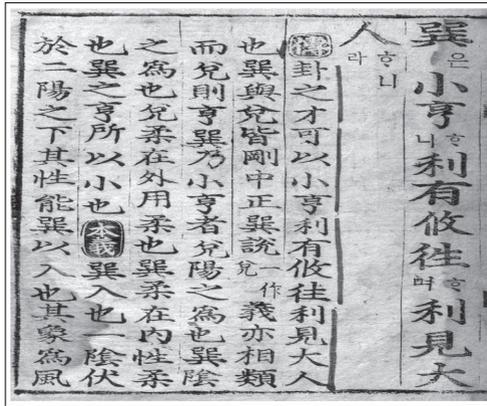
45 『世祖実録』世祖11年10月21日乙未の条に「御丕顯閣、……又召鄭自英、丘從直、兪希益兼藝文儒臣等、問難周易口訣、上曰、不意兼藝文精熟至此」とある。

46 『世祖実録』世祖11年11月1日乙巳の条に「御丕顯閣、……又召兼藝文鄭蘭宗等、講周易口訣」とある。

47 『世祖実録』世祖11年11月15日己未の条に「御丕顯閣、……講儒生等經書、又召兼藝文儒臣等、論難易口訣」とある。

48 『世祖実録』世祖11年11月24日戊辰の条に「御思政殿、召蓬原府院君鄭昌孫等、講兼藝文儒臣等易訣、又講儒生金彦莘等經書」とある。

文儒臣)⁵²などに、多くの儒臣、宗宰、儒生たちと論難・問難し、『周易』の口訣を定めていった。そして世祖は、翌年1月21日、礼曹に「自ら文宣王を祭祀し、明倫堂にお出ましになり、『周易口訣』を頒布すること」と伝旨し⁵³、実際その年の3月5日、成均館の儒生たちに親定⁵⁴『周易』口訣を領った⁵⁵。この時領った『周易』口訣が、今も伝わっている、乙亥字に刊行された康寧殿口訣『周易伝義』だと推定される（【図2】参照）⁵⁶。



【図2】康寧殿口訣『周易伝義』⁵⁷

- 49 『世祖実録』世祖11年11月25日己巳の条に「御丕顯閣、……召兼藝文儒臣等、講易口訣、特賜轉德鄭自英裘一領」とある。
- 50 『世祖実録』世祖11年12月17日庚寅の条に「御丕顯閣、召兼藝文儒臣等、親問易口訣、傳曰、是人等、於易句讀頗精、良用嘉悅、今後給與予親定口訣、俾之畢覽」とある。
- 51 『世祖実録』世祖11年12月23日丙辰の条に「御思政殿、設飲福宴、……又召兼藝文儒臣等、論易口訣、謂曰、是人等、精妙已熟、予愛之重之、令世子饋之酒」とある。
- 52 『世祖実録』世祖11年12月24日丁酉の条に「御丕顯閣命召侍講官等、講儒生經書、召兼藝文儒臣、論易口訣」とある。
- 53 『世祖実録』世祖12年1月21日甲子の条に「遂傳旨禮曹曰、親祀文宣王、御明倫堂、頒周易口訣、世子齒列、出題取士開宴、令移文諸道知會」とある。
- 54 ここでいう「親定」は、世祖が『周易』の口訣を定めた作業を主導したという意味である。
- 55 『世祖実録』世祖12年3月丙午の条に「幸成均館、王世子與孝寧大君補……工曹參判丘從直及承旨等隨駕、上謁文宣王如儀、頒親定口訣」とある。
- 56 前掲安秉禧論文（1983年）、5頁。
- 57 国立中央図書館蔵、康寧殿口訣『周易伝義』（古1231-88）。

『小学』と四書五経への口訣作業は、いわゆる「世祖親定『周易』口訣」についての記事が初めて登場した世祖11（1465）年末から、既に行われていた。つまり、その年の11月礼曹に、我が国の先代の学者たちが定めた四書五経の口訣と、鄭夢周の『詩』の口訣を広く収集するよう命じたのである⁵⁸。そして翌世祖12（1466）年2月には、口訣の草案に校正作業が行われた。次の実録の記事はこれに関するものである。

また、様々な経書に口訣をつけ、校正した郎官を召して講論した。最初、口訣を定めた者と、それを校正した者に、互いに代わる代わる問難させ、負けた者には酒で罰を与えた。先に宰樞に分けて命じ、四書五経と『左伝』の口訣を出させ、また多くの儒臣に校正させた⁵⁹。

上記の記事を見ると、世祖は多くの宰相たちに四書五経と『春秋左氏伝』に口訣を分担させた。実際、口訣作業は、様々な部署の郎官たちが進めたが、口訣の草案を定めた初定口訣者、つまり最初の口訣を定めた者と、校正者、すなわち、口訣を校正した者を呼び集めてお互いに問難するようにしたのだ。様々な経書に口訣をつける作業は、その後、2年余の間続けられた。これに関連する、実録の記事を見てみよう。

- ①世祖13年12月1日癸巳の条「王が便殿にお出ましになり、河東君鄭麟趾、前禮曹判書姜希孟、成均館大司成金禮蒙、中樞府僉知事鄭自英、司憲府大司憲梁誠之及儒臣李克基・崔池・柳允謙・李孟賢・崔自濱・李鐘山・金龜・成倪・李淑城に命じて、『詩経』の口訣を校正させ、蓬原君鄭昌孫、行上護軍宋處寛、行護軍丘從直、戸曹參判李坡、右承旨李克増及儒臣兪鎮、兪希益、李亨元、閔貞、孫次綿、權瑚、李瓊全、高台鼎、金季昌に命じて、『書経』の口訣を校正させた」⁶⁰。
- ②世祖14年8月8日乙未の条「崔恒等に命じて、『小学』と『周易』の口訣を

58 『世祖実録』世祖11年11月11日己巳の条に「命禮曹、廣求本國先儒所定四書五経口訣、與鄭夢周詩口訣」とある。

59 『世祖実録』世祖12年2月9日辛巳の条に「又召諸書口訣校正郎官、講論、初定口訣者與校正者、交相問難、負者罰之以酒、先是、分命宰樞、出四書五経及左傳口訣、又使諸儒臣校正」とある。

まず定め、次に『禮記』の口訣を定め、『詩』と『書』の口訣のような場合は、陽村権近が已に定めておいたので、しばらく中止するように命じた⁶¹。

- ③世祖14年8月16日癸卯の条「王不調。多くの皇族や宰樞たちが見舞った。寶慶堂の後庭で引見し、酒を賜い、河東君鄭麟趾等々に命じて『詩』の口訣を定めさせた。數章して終えた⁶²。
- ④世祖14年8月19日丙午と21日戊申の条「王不調。多くの皇族や宰樞たちが見舞った。寶慶堂の後庭に引見し、召丘從直等を召して、『詩』の口訣を讐校させた。続いて酒席を設けた⁶³。

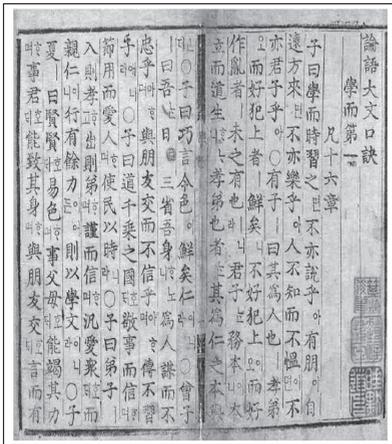
上引の記事を見ると、世祖13(1467)年、世祖14年にも『小学』をはじめ『周易』、『礼記』、『詩』、『書』などの經書に口訣をつける作業が行われていた。ここには鄭麟趾(1936-1478)、姜希孟(1424-83年)、金禮蒙(1406-69)、鄭昌孫(1402-77)、宋處寬(1410-77)、丘從直(1404-77)、崔恒(1409-74)などが参加して口訣に校正と讐校をつける作業を行っていた⁶⁴。

世祖治世末年に行われた『小学』と四書五經の口訣作業についてのより詳しい情報は、崔恒の『太虚亭集』に掲載されている「經書小學口訣跋」で確認することができる。前述したように、崔恒はすでに世宗治世から四書を諺文に翻訳する作業に参加していたことがある。崔恒のこの発問には、經書口訣をすすめた背景が、次のように叙述されている。

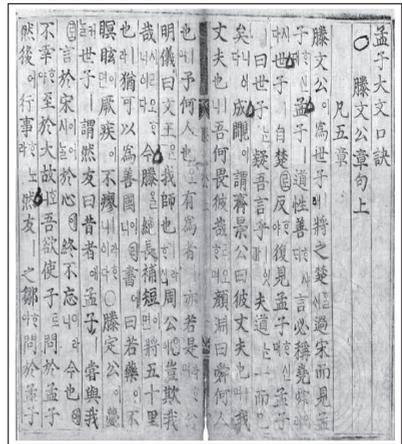
- 60 『世祖実録』世祖14年8月8日乙未の条。原文は以下の通り「御便殿、命河東君鄭麟趾、前禮曹判書姜希孟、成均館大司成金禮蒙、中樞府僉知事鄭自英、司憲府大司憲梁誠之及儒臣李克基、崔池、柳允謙、李孟賢、崔自濱、李鐘山、金龜、成倪、李淑斌、校正詩口訣、蓬原君鄭昌孫、行上護軍宋處寬、行護軍丘從直、戶曹參判李坡、右承旨李克增及儒臣兪鎭、兪希益、李亨元、閔貞、孫次綿、權瑚、李瓊全、高台鼎、金季昌、校正書口訣」。
- 61 『世祖実録』世祖13年12月1日癸巳の条。原文は以下の通り「命恒等、先定小學周易口訣、次定禮記、若詩書口訣、則陽村已定、姑停之」。
- 62 『世祖実録』世祖14年8月16日癸卯の条。原文は以下の通り「上不豫、諸宗宰問安、引見于寶慶堂後庭、賜酒、命河東君鄭麟趾等、定詩口訣、數章罷」。
- 63 『世祖実録』世祖14年8月19日丙午、21日戊申の条。原文は以下の通り「上不豫、諸宗宰問安、引見于寶慶堂後庭、召丘從直等、讐校詩口訣、仍設酌」。
- 64 前掲安秉禧論文(1983年)9頁、によれば、口訣と関連した記事に登場する人物は、70名ほどあり、その内、丘從直(12回)、鄭自英(11回)、金禮蒙(6回)が最も登場回数が多い。

おおよそ本を見ようとする者は、必ず先ず正經を明らかにせねばならず、正經を明らかに知れば、様々な学者たちの注解は、これをふまえて立つことになる。本を読もうとする者は、先ず語訣（口訣）を正くつかまねばならず、語訣が正しければ、他の疑問は自ずから消えてしまう。然らば則ち正經に口訣があることは、儒生たちに月を指し示す指のようなものである⁶⁵。

跋文で崔恒は語訣、つまり口訣が、儒生たちが本を読んでいこうとする時に、月を指し示す指のような指針の役割を果たすと書いている。そして崔恒の跋文で「正經に口訣があること」といったように、口訣は正經、つまり經典の大文に付けられていることを原則とした⁶⁶。参考までに、この時期に刊行されたものと推定されている次の『論語大文口訣』と『孟子大文口訣』を見ると、口訣は経書の大文にのみ付けられている。



【図3】 論語大文口訣⁶⁷



【図4】 孟子大文口訣⁶⁸

65 『太虚亭集』2巻「跋類」〈経書小學口訣跋〉に「大抵欲觀書者、須先曉正經、正經既曉、則諸家之解已歸。欲讀書者、須先正語訣、語訣既正、則他岐之惑自祛。然則正經之有口訣、誠儒者指月之指也」とある。

66 前述したように、世祖治世に行われた仏典諺解では、経文はもちろん注解まで諺解が行われていた。しかし儒教経書の場合には、後の宣祖治世に校正庁で四書三經に諺解を完成させた時にも、経文に対してだけ諺解が行われた。

67 『論語大文口訣』（金屬活字本（乙亥字）、高麗大学校中央図書館所蔵）。

一方、崔恒の上記の跋文では、世祖治世に行われた経書口訣作業の来歴が、次のように記述されている。

『易』というのは、本が最も精妙で隠微なので、天下の優れた学者でなければ、誰が明らかに表すことができようか。謹んで思うに我が王様が様々な政務の最後に、口訣を臨時に定められ、四聖人の意志が手のひらのように明らかに現れた。また『小学』も、道に入る門から学ぶ者たちにとってより重要なので、これもまた直々に口訣を定められた。『詩』は河東君鄭麟趾、『書』は蓬原君鄭昌孫、『礼』は高靈君申叔舟、『論語』は漢城府尹李石亨、『孟子』は吏曹判書成任、『大学』は中樞府同知事洪應、『中庸』は刑曹判書姜希孟に口訣を定めるよう命じられた。全て終えると、中樞府知事丘從直、同知事金禮蒙、工曹參判鄭自英、吏曹參議李永垠、戸曹參議金壽寧、前右承旨朴樾に命じて、論議して矯正するようにさせた。緊要なところに出会うたびに、全て英断を下された。典校署に命じて印刷・頒布させたが、『周易』だけは正經の下に程朱の伝を併せ付けて印刷させた⁶⁹。

跋文によれば、『小学』と四書五經⁷⁰の口訣作業で、初定口訣者、つまり口訣を付けた人は、世祖、鄭麟趾、鄭昌孫、申叔舟、李石亨、成任、洪應、姜希孟であり、これを校正したのは、丘從直、金禮蒙、鄭自英、李永垠、金壽寧、朴樾などであった。しかし崔恒の跋文には出てこないが、崔恒自身もまた、世祖治世の経書口訣作業に重要な役割を果たしたものと見られる。これに関しては、徐居正が崔恒の碑銘で既に確認したことがあるが、「太虚堂集序」でも次のような記録がある。

68 『孟子大文口訣』（金屬活字本（乙亥字））、東国大学校中央図書館所蔵。

69 『太虚亭集』2巻「跋類」〈経書小學口訣跋〉に「易之爲書、最精妙微隱、非天下之至神、孰得而開示。恭惟我殿下、萬機餘閑、暫定口訣、四聖之旨、炳如指掌。又以小學、尤切於學者入道之門、亦自定訣。詩則命河東君臣鄭麟趾、書則蓬原君臣鄭昌孫、禮則高靈君臣申叔舟、論語則漢城府尹臣李石亨、孟子則吏曹判書臣成任、大學則中樞府同知事臣洪應、中庸則刑曹判書臣姜希孟、訣之。既訖、又命中樞府知事臣丘從直、同知事臣金禮蒙、工曹參判臣鄭自英、吏曹參議臣李永垠、戸曹參議臣金壽寧、前右承旨臣朴樾等、論難校正。每遇肯綮、悉稟睿斷。迺命典校署、印而頒之。唯易則正經之下、并附程朱之傳印之」とある。

70 「太虚堂集序」に「及佐我世祖、再參動盟、位尊台鼎正、當作新文運之日、自任斯文制作之責、五經四書口訣、經國大典等編、皆所纂定也」とある。

我が世祖王を助け、何度も功をたてて地位が領議政まで上り詰め、文運を馳せるべき日に至って、自ら斯文の制作責任を担い、五経の口訣と『経国大典』のような本を全て編集した⁷¹。

徐居正のこの序文によれば、崔恒は世祖治世の経書口訣作業に、単に参加したに留まらず、総元締め地位にあったと見ることができる。前に述べたことがあるが、彼は世宗治世に、訓民正音創製に参加し、1444年集賢殿の教理として朴彭年、申叔舟、李塏らとともに『韻會』をハングルに翻訳し、1445年には集賢殿の應教として「龍飛御天歌」をつくる仕事に参加し、続いて『東国正韻』、『訓民正音解例』などを撰進した。また、1461年には、梁誠之の『蠶書』をハングルに翻訳して刊行するなどもした⁷²。彼のこのような経歴に照らしてみると、彼が徐居正の言のように世祖治世の口訣作業の総元締めの役割を果たしていた可能性もある。

4. 柳崇祖の七書諺解

世宗治世に始まった『小学』と四書五経の諺解作業が口訣の段階で中断していたが、世祖治世の末年に至って、口訣を完成するところまで進んでおり、その時点で残っているのは『小学』と四書五経に完全な韓国語訳である諺解である。口訣は諺解の前の段階だからである。この点と関連して、注目を集める人物が柳崇祖（1452-1512）である。

柳崇祖は、1489（成宗20）年に式年文科に丙科で及第して役人生活を始めたが、早くから師儒録に入って、成宗、燕山君、中宗に至る18年間の仕官の道をほとんど成均館で学官として送りながら、趙光祖（1482-1519）など新進気鋭の人物を多数輩出したことで有名である⁷³。退溪李滉は、洪徳演（1493-1553）の墓誌名の序文で、柳崇祖が大司成だったときの成均館の姿を「祠宇は堂々としていて、学問は止むことを知らず、経典の教えは壮大だった」と表現したことがある⁷⁴。息子の洪仁祐（1515-1554）が書いた洪徳演の行状で「経伝は大司

71 崔恒の「経書小学口訣跋」に出てくる口訣分担履歴などを見ると、『左氏伝』の口訣は完成しなかったように見える。「五経」のうち『春秋』または『左氏伝』だけ、口訣が定まらない理由については、別途明らかにする必要がある。

72 『韓国民衆文化大百科辞典』の「崔恒」の項目参照。

73 『韓国民衆文化大百科辞典』の「柳崇祖」の項目参照。

成柳崇祖・尹倬に学び、子史については母弟の金安国に聞いた」としたことから⁷⁵、成均館学官として柳崇祖が經学に長けていたという事実を知ることができる。柳崇祖とともに中宗を輔弼した金宗直の弟子、姜渾（1464-1519）の場合には、道学に及ぼした彼の功を権近と比べるほどだった⁷⁶。柳崇祖が書いた『大学十箴』と『性理淵源撮要』は、中宗の特命で刊行、頒布され、若い文臣たちと儒生たちの学問に、大きな影響を与えた⁷⁷。柳崇祖がかりに成均館の学官としてではなく、私的に弟子たちを養成する機会が持てず、後代の道統論から疎外されているが⁷⁸、彼が經学や性理学方面で当代最高といえるほど優れた学者であったことは間違いないようだ⁷⁹。

柳崇祖に関連して、ここで見ておきたいのは、儒教經典講究所が1923年に明らかにした「諺解の来歴」で「成宗朝に至って柳崇祖が命を受け、『七書諺解口讀』を纂輯」したという点である。柳崇祖の經書諺解については彼の文集である『真一齋集』では、金熙洛（1761-1803）の「筵中記聞」を引用して、次のように書いている。

戊午年（正祖22年）10月某日に嶺南文蹟を持って入侍した時、王から「經書の諺解は誰がしたことなのか」と問われ、諸臣は未だ答えられなかった。王が仰るには、「以前には柳眉巖がしたと思っていたが、今嶺南文蹟を見ると、大司成柳崇祖がしたことだとある。彼は本当に巨儒だ」と。承旨蔡弘遠が言うには

-
- 74 『退溪集』47巻「僉知中樞府事洪君墓誌銘并序」に「我究厥由、師友祠宇堂堂、泮水泱泱、經訓皇皇」とある。金鍾錫「真一齋柳崇祖の性理説に関する分析的考察」『民族文化論叢』49、2011年、嶺南大学校民族文化研究所、392頁から再引。
- 75 『恥齋遺稿』1巻「府君僉知中樞府事行狀」に「經傳則考於大司成柳公崇祖尹公倬、子史則就質於金慕齋安國」とある。前掲金鍾錫論文、同頁から再引。
- 76 『真一齋集』4巻「嘉善大夫同知中樞府事完山柳公神道碑銘（姜渾）」に「道學淵源、孰能發揚、陽村之後、惟公一人」とある。
- 77 金起賢「柳崇祖の道學と思想史的位相」『退溪學報』第109集、2001年、退溪学研究院、228頁。
- 78 前掲金起賢論文、2001年、234頁。金鍾錫「道統論に隠されていた朝鮮中期の儒学者真一齋柳崇祖」『国学研究』19、2011年a、韓国国学振興院、参照。
- 79 現在、学界でも柳崇祖が性理学分野で当代最も優れた学者だったことについて大きな異論はない。前掲金鍾錫論文、2011年a、84頁参照。この論文では、李丙燾『韓国儒学者』アジア文化社、1987年、162頁、および前掲金起賢論文、2001年などを、柳崇祖についてのこのような評価の根拠としている。

「彼は単に諺解のみではなく、大学箴もつくって広く刊行しました。大司成五年間に儒教の教化が大きく進み、我が学問の素晴らしい宗匠になりました」と。王は「そうなのか」と。蔡弘遠が「今その文蹟を見ますと、学問の高い境地をまことに欺くことはできません」と。王は「そうか」と仰り、特別に称賛なさり、賞を与えた〔出正言金熙洛筵中記聞〕⁸⁰。

しかし柳崇祖の經書諺解についての上記の問答内容は、『正祖実録』には出てこない。実録で柳崇祖の七書諺解に言及したのは、哲宗13（1862）年8月27日の次の記事である。

（左議政趙斗淳が）申し上げるには「吏判に追贈した文穆公臣柳崇祖は、中宗朝の名臣です。七書の諺解は、この名臣の畢生の精力がもたらしたもので、彼が斯文に及ぼした功労が大きいのです。請うらくは貳相に追贈し（儒生たちに）經書に力を尽くすように勧める下教をお下してください」と。これに従った⁸¹。

上の記事を見ると、柳崇祖が実際七書を諺下した可能性が大きいということが出来る。しかし、彼が文字通り七書を諺文に完全に翻訳したのか、あるいは七書に諺文の「吐」をつけたのかははっきりしない。彼が纂輯したという本の名前も『七書諺解口讀』であって、「諺解」と「口讀」がともに言及されている。宣祖7（1574）年10月25日の実録記事の中に、柳希春が「柳崇祖などが定めておいた吐が、本当によくできています」といった部分があるのを見ると⁸²、柳崇祖が行った作業が「口訣」だった可能性もある。これと関連して、朝鮮時代の学者たちのいくつかの記録をさらに詳しく見ると、次のようになる。

80 『真一齋集』4巻「記聞録」に「戊午〔正宗二十二年〕十月日、持嶺南文蹟入侍時、自上下問、經書諺解果誰爲之。諸臣未及對、上曰曾以爲柳眉巖爲之、今見嶺蹟、大司成柳崇祖爲之、儘是巨儒也、承旨蔡弘遠對曰、不但諺解、嘗纂進大學箴、刊行于世、且五年大司成、儒化大行、蔚爲斯文宗匠也。上曰、然矣。弘遠曰、今見其文蹟、其學問造詣、儘不可誣也。上曰、然矣。特加稱賞〔出正言金熙洛筵中記聞〕」とある。

81 『哲宗実録』哲宗13年8月27日丁丑の条に「又啓言、贈吏判文穆公臣柳崇祖、中廟朝名臣也。七書諺解此名臣畢生精力所在、其有功於斯文厚矣。請加贈貳相、以風勸劬經之教。從之」とある。

82 『宣祖実録』宣祖7年10月25日丙寅の条に「希春對曰、柳崇祖等所定吐誠善、然今進講尙書、亦往往有誤處、未審當改否」とある。

- ①私が柳眉菴の日記を参照すると、經書諺解の存在が柳參議から始まっているが、概して彼は經学に素養があり、見識が広く、確固としたものであり、素晴らしいことは間違いない事実ただけに（訳注：その諺解解釈が残されていないのは）惜しまれる⁸³。
- ②概して我が国の音が中華のとは全く違うので、音吐と諺釈がなかったら、学者たちは往々にして誤謬を免れなかった。柳眉菴の日記を見ると、經書は既に柳崇祖などが定めた吐があったが、たまに間違ったところがあったので、公に命じて釋疏を撰定させた。後に公は『大学』1編は仕上げて王に捧げ、その他は一部は脱稿したり、あるいは脱稿できないこともあったという⁸⁴。
- ③（先輩達の著述）我が国の人たちは、才能氣質が鈍く、たとえ文を読めても、先輩達の著述が、大きな功力を持っていることを知らず、多くは湮没させてしまった。それで後の人たちは著述を通して知ることがない。たとえば經書の諺解は參議柳崇祖から始まったと、柳眉菴日記で言っている⁸⁵。
- ④我が国の語音が既に中国と大いに異なり、經書の句読も我が国の音で解釈せざるを得ない。……眉菴柳希春の『經筵日記』に「經書の諺釈は參議柳崇祖から始まった」としていた⁸⁶。

上の資料で、①と②は星湖李瀾（1681-1763）、③は順庵安鼎福（1712-1791）、④は五洲李圭景（1788-?）のものである。①と③、④でこれら実学者たちが共通に言っていることは、「儒教經書への諺解・諺釈は柳崇祖から始まった」という点である。②では「柳崇祖などが定めた吐」としているが、柳崇祖の七書諺解が七書に「吐」、つまり口訣を定めた可能性も匂わせているが、諺解が音吐を含むこと⁸⁷を考えれば、諺解の可能性が否定されることにはならない。柳崇祖の『七書諺解口訣』が伝わっていない今のところは、口訣と諺解、この

83 『星湖僿説』25卷「經史文」‘柳崇祖’に「余考柳眉菴日記、經書之有諺釋、自柳參議始、蓋其經學有素見識宏、確有不可誣者、惜乎」とある。

84 『星湖僿説』53卷「記蓋」〈周易校正廳宜醞圖記〉に「我東方音、與中華絕異、若無音吐諺釋、學者或不免往往外錯。考柳眉菴日記、經書曾有柳崇祖等所定吐、亦時有誤處、申命公撰定釋疏、後奏大學一篇、其餘或脫蒙、或未及也」とある。

85 『順菴集』13卷「雜著」〈先輩著述〉に「東人鹵莽、雖云讀書而不知前輩著述用工之深、而率多湮沒。後人無從而知之。如經書諺解、始于柳參議崇祖、柳眉菴日記言之矣」とある。

86 『五洲衍文長箋散稿』「經史編1 - 經典類1」〈經典總説〉「五經四書 大全諺解口訣正音」韓国古典総合データベース (<http://db.itkc.or.kr/>) の「古典翻訳書」収録本。

二つの可能性をともに考えておく他はない。

一つ明らかなことは、朝鮮後期はもちろん、近代に至っても、後代の学者たちがほとんど同じように四書三経の諺解が柳崇祖から始まったと言っている点である。前に検討したように、世祖治世に大規模な人員が動員され、七書の口訣が既に完成している。それでは、なぜ柳希春を始め、後代の学者たちは経書の諺解が世祖が主導した七書口訣ではなく、柳崇祖に始まったと言っているのだろうか。これは恐らく後代の学者たちの目から見て、世祖治世のときに定めた口訣より、柳崇祖が定めた口訣（または諺解）が、はるかに性理学に深い理解に基づいて行われたと考えられていたからだろう。たとえ退溪や栗谷に肩を並べるほどではなくても、柳崇祖の七書口訣と諺解は、それ以前とは次元が違う高い水準のものだったということが、後代の学者たちの共通した評価だったと見ることができる。

Ⅲ. 口訣反対論を通してみる経書口訣の両面性

漢文で書かれている経書を基本テキストにしていた朝鮮時代の儒教教育で、経書口訣は避けることのできない前提条件である。そこで口訣が経書の学習に必ず役に立つとか、望ましいことばかりではないという主張もあった。いわゆる「口訣反対論」というべきこの主張を調べてみると、経書口訣が当時の教育でもっていた、また別の意味を垣間見ることができる。

先ず初めに目に付く口訣反対論は、世宗治世の孟思誠（1360-1438）によって提起された。先に世宗10（1428）年閏4月に王が、太宗治世の権近の例をあげ、卞季良に経書口訣について話した記事⁸⁷を調べてみたことがあるが、王と卞季良の対話のすぐ後に、孟思誠の口訣反対論と、これに対する王の反駁が次のように続いている。

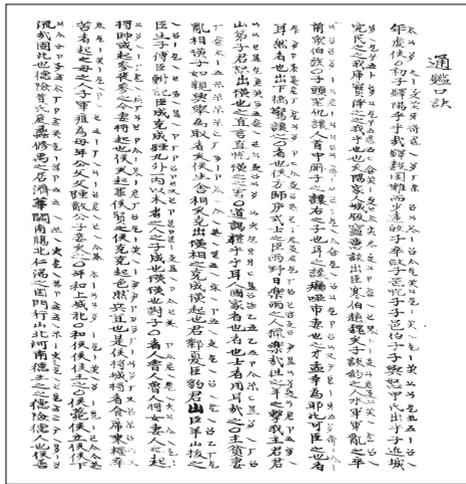
右議政孟思誠が言うには「吐があれば、臣は学ぶ者が励んで研究しないのではと恐れます」と。王が言われるには、「程子・朱子も亦学ぶ者が経書の深い意味に到達できないことを懸念したため、註解を付し、分かりやすいようにした。

87 『星湖全集』53巻「記蓋」〈周易校正廳宣醞圖記〉に「至乙酉丙戌間、趙月川亦以翻譯四書小學校正被召、謂之翻譯、即今之諺解是也。諺解則音吐在其中、周易校正亦猶是也」とある。

88 『世宗実録』世宗10年4月18日己亥、前注23参照。

地方の教導たちがもしこれを持って人々を教えれば、どうして助けにならないものか」と⁸⁹。

孟思誠が口訣に反対した論理は、一言で言えば「口訣や吐があると、学ぶ者たちが経書を一生懸命研究しない」ということである。事実、口訣や吐は漢文原文の句読処に韓国語語助辞を表示することを超えて、時には漢字の音と意味を全て表示してくれることもあった（【図5】参照）。



【図5】通鑑口訣（松崖編）⁹⁰

孟思誠が、王が強調したこと、経書の付帯意味を分かりやすく教え、学べるようにしてくれる口訣の効果を知らないわけではないだろう。しかし経書の勉強には、漢字一文字一文字、漢文一文一文を自分の力で努めて理解しようとする努力が重要だという観点から見ると、経書原文に付けられた口訣や吐は、学ぶ者の刻苦の努力がもたらす学習の効果を最初から期待できなくしてしまうと

89 『世宗実録』世宗10年4月18日己亥の条に「上語卞季良曰、……右議政孟思誠曰、有吐則臣恐學者、不着力研究。上曰、程朱亦慮學者、未達經書奧旨、故著註解、今其易知。外方教導、若因此誨人、則其無補乎」とある。

90 国立中央図書館、通鑑口訣（松崖編）한古朝50-145。

考えられる。孟思誠の口訣反対意見には、「勉強とは本来難しくしなければならぬもので、簡単な勉強は結局残るものがない」という考えが下敷きになっていたと見ることができる。

経書の勉強を容易にする口訣の両面性を警戒する考えは、孟思誠一人にとどまるものではなかった。成宗21（1490）年に左議政洪應（1428-1492）が口訣だけで進講する東宮の経書の勉強について「単に口訣だけで学習すれば、学問は最後まで精通することはできない」といった批判をした⁹¹のもまた、同じ考えに立っていたと見ることができる。成宗22（1491）年12月19日、特進官李則（1438-1496）が世子が読む書冊に付けられた口訣をみて、「大抵文を読む人が口訣を使って読むようになれば、心に小さな怠けが生じて学習の妨げになる」と批判した⁹²のも、同じ脈絡で理解することができる。このように、朝鮮前期の学者たちの中には、口訣が経書の勉強を易しくするものとして、むしろ経書の勉強に害になるという論理で経書口訣に反対していたことがたびたびあった。

中宗24（1529）年の実録記事の中には、やや異なった側面から提起された経書口訣反対論がある。多少長いが関連する内容を要約すると、次のようになる。

朝講にお出ましになった。大司諫魚得江がいうことには「……中国では、凡ての経伝や書史に、皆口訣はなく、語句を切る處に點圈を付けるのみです。しかし我国では方言で口訣を付けたり、至極猥瑣です。今経筵で進講する時、句節や文字ごとに、全て口訣を付け、小兒たちを教えるようですが、これはいけないことです。願わくは、口訣は付けず、すべからく該博で通じるように正確な講論を行い、或は訓詁で解釈もするようにすることが妥当です。また、科擧の講經の時、試官が口訣一つだけ間違っても、不通を与えますが、これはさらにいけません」と。領事張順孫がいうには「万が一口訣を付けないとすれば、文理通らず、学ぶことを知っているのか、知らないのかも分からなくなってしまいます。また、経筵で口訣を付けることは、お上のご存知ないと思っているからではなく、乃ち尊敬しているからです。このような風習は昔からのもので、

91 『成宗実録』成宗21年10月7日乙丑卯の条に「應日、東宮進講書、皆用口訣、徒以口訣學習、則學終不通矣。且東宮既不問其義、書筵官又不講解、徒事口讀、此甚不可。必須論難義理、雜以古今事變然、後庶爲有益」とある。

92 『成宗実録』成宗22年12月9日辛酉の条に「特進官李則啓曰、世子學問既進、句讀訓釋、至爲詳明。臣觀世子所讀之書、書口訣。大抵讀書之人、書口訣而讀之、則心有小懈、妨於學習。請今後除口訣。上曰、可」とある。

今それを廃することはできません。……」と。同知事曹繼商がいうことには「中国人たちは、言語が皆文字であるため、口訣を付けていませんが、我が国の人々は、やむを得ず口訣があって次に文理が通ようになります。これは既に習慣になっていることで、今変ずることは難しいのです」と述べた⁹³。

上の記事を見ると、大司諫魚得江（1470-1550）は、猥瑣、つまり庸俗だということを理由にして、經典に口訣をつけることに反対した。中国では、句読点へ圈点だけを付けるが、我々は句節や文字ごとに口訣をつけ、大いに庸俗で下品だというのが彼の主張である。見た目だけではなく、經筵で經典を講ずる時、經典の文字と句節ごとに口訣を付け、科擧の試験では、口訣一つ間違えても、良い点数を取ることが難しいことも口訣の庸俗を示しているというのが魚得江の主張である。これに対して、領事張順孫（1453-1534）、同知事曹繼商（1466-1543）は、口訣がなければ、文理が通らず、口訣を通さねば分かっていいのか、分かっていないのかを評価することができない点を挙げて、魚得江の見解に反駁する。

また別の口訣反対論は、中宗34年に同知成均館事成世昌（1481-1548）が、王と当時の科擧と教育の問題を論じる過程の、一つの言葉から見出すことができる。たとえば、彼は「以前の儒者たちは、読書する時、音と意味、口訣をすべて師匠から学んだが、今では人々は、一人で学んで師匠に質問しようとしなから、成就を期待しても無理だろう」と、口訣を批判する⁹⁴。当時の口訣を付けて勉強したり、口訣が付いている本で勉強するのが一般化しつつ、従師受

93 『中宗実録』中宗24年5月25日己未の条に「御朝講。大司諫魚得江曰、……且中原、則凡經、傳、書、史、皆無口訣、而其絕句處、點圈而已。我國則以方言爲口訣、至爲猥瑣。今於經筵進講時、句句字字、皆懸口訣、如教小兒、此爲不可。請勿懸口訣、須爲該通確論、或以其訓詁解之爲當。且科擧講經之時、試官以一口訣之誤、爲不通、此尤不可也。領事張順孫曰、若無口訣、文理不通、而其知學與否、亦未可知。且於經筵懸口訣、非以爲自上不知、乃以尊敬也。此習已久、今不可廢。……同知事曹繼商曰、中原之人、其言語皆是文字、故不爲口訣矣。我國之人、不得已有口訣、然後可解文理。此已成習、今難變矣」とある。

94 『中宗実録』中宗34年6月10日丙午の条に「世昌曰、爲儒者、不可不知實學文章吏治、皆出於此、立朝事君、亦本於是、而儒生輩、喜看雜書、厭讀實學、少而鹵莽、長而滅裂、弊將難救。近來別試、不以講經取人、故儒生益爲懈怠。今後別試、皆用講經、使儒生、知不爲實學、不得取第、則人皆務業矣。且古之儒者、其於讀書、音義口訣、皆有師受。今也、人自爲學、不肯從師、質問師長、雖欲有爲、何可得哉。上曰、所啓至當」とある。

學、つまり師匠に従って学ぶ伝統が衰えつつあることを憂慮しているのである。彼が見るところ、口訣は経書を自習することを可能にしつつ、師匠と弟子が直接対面して教え・学ぶ時に受ける教育効果を期待することが難しくなる副作用を生んでいた。

宣祖治世に盧守愼（1515-1590）は、やや異なった側面から経書口訣に反対した。宣祖7（1574）年、王が経筵の席上で柳希春（1513-1577）に四書五経の口訣と諺解を上程せよとの命を下すや、これを聞いた右議政盧守愼が大きく反発したが、これに対して柳希春は『眉巖日記』に、次のように書いている。

午後、弔服を整え西小門の外へ行き、承旨閔起文に靈柩を尋ねて致奠し、祭文は祝官に讀ませた。……ちょうど右議政盧守愼が後に続いて致奠し、私たちと出会った。私たち三人がお会いしたら、盧公が言うには「殿下から公に四書五経の吐積を定めよと任せたそうですが、その通りですか」と。私がそうだと答えると、盧公が言うには「文意は必ずしも自分の意味を他人に広く知らせる必要がないから、四方の儒生たちが読むままに任せねばなりません。今、若し一つに定めて印刷して出すならば、講書の際、是を基準にすることになり、無念にも落ちる人が多いでしょう。その上、歪曲された巧妙な説で、様々な学説を統一することはできません」と。私は、「ただ適当ではないことを適切な説に従わせることが、どうして歪曲され巧妙だとされるのでしょうか」と言った。李湛が言うには「必ず経書に明るい数名を率いねばなりません」と。私は答えて「今宜しく広く尋ねて相談して折衝します。弘文館、成均館等にも尋ね、太學儒生にも皆尋ねます」と言った。盧公は本来文義を分析することを嫌がり、甚だしくは御前で文を読む必要がないという話までしたのであるから、このようなことを言うのは当然だ⁹⁵。

これによると、盧守愼は「文義を儒生たちが読むに任せないといけなくて、

95 『眉巖集』12卷「日記」甲戌（1574）年10月13日の条に「午後、持弔服往西小門外、尋閔承旨起文靈柩而致奠、祭文則令祝讀之。……盧公曰、聞上付公以四書經書吐釋之定、有諸。希春對曰、有之。盧公曰、文義不必致意、四方諸生、宜任其所讀。今若一定而印出、講書之際、以是爲準、則人多冤落。況曲巧之說、非所以衆學也。希春曰、只云未當而從至當耳、豈必以曲巧爲哉。李湛曰、必率明經數人而爲之矣。余答曰、今宜廣詢博訪而折衷之。可問於弘文館、成均館等處、而太學儒生、亦可盡問矣。盧公素惡辨析文義、至以不可讀書之說、發於御前、宜乎有此言也」とある。

もし一つに定めて、經書でこれを基準にすれば、無念にも落ちてしまう人が多いでしょう」として、經書の吐積、つまり口訣と諺解を定めるのに反対していた。口訣と諺解はその基本目的が經書に解釈の標準を立てることなのだが、盧守愼はこれ自体に反対するのである。盧守愼のこのような口訣反対論は、經書の学習と教育、そしてその結果に対する評価という面において、口訣が持っていた両面性をよく示している。柳希春が述べた通り、広く意見を求め、折衝して多様な解釈を追求すれば、「歪曲された巧妙な説で、多くの学説を統一しようとしている」という疑いは晴れるだろう。しかし一つの解釈が標準にされると、残りの多くの解釈の可能性が封鎖され、既存の多様な解釈が廃される問題点は、依然として残る。順庵安鼎福が書いたように、退溪李滉らの傑出した性理学者が登場し、多くの学者たちの經書解釈を折衝して、宣祖18（1585）年に校正序を設置し、諺文吐を一つに定め、諺解を完成して、続いて以前に存在していた多くの学者たちの訓解が全て廃された⁹⁶。口訣と諺解が經書の学習と教育、そしてそれに対する評価の前提となる解釈の標準を立てるためのものではあるが、別の一面では、經書理解の多様性を否定し、画一化した經書解釈を強要する結果を生むこともできるのであろう。盧守愼はこの点を警戒していたと見ることができる。

IV. 結語

これまで見てきたように、高麗末、性理学導入以後、朝鮮前期には、性理学という新しい儒学の観点から儒教經書を新しく解釈するための努力がたゆまず続いた。口訣は經書を完全な我々の言葉の翻訳である諺解への最初の段階であり、口訣を定めるためにも、經書の相当な水準の理解が必要である。これに伴い、仏教書が既に15世紀中に注解まで大挙翻訳されて出版されたのと異なり、儒教經書は、これよりはるか百年以上過ぎた17世紀初めに入ってようやく大文に対する韓国語翻訳を仕上げることができた。儒教經書に対する当時の儒者たちの理解水準が、仏教書ほど成熟していなかったということである。このような時代の限界にもかかわらず、口訣は經書の学習と教育、そしてそれに対する評価に必須不可欠だったため、早くから国家次元でたゆまず推進する他なか

96 『順庵集』13卷「雜書」〈先輩著述〉に「退溪先生經書釋義、雜引諸家訓義而折衷之。若金繼、李克仁、孫暲、李得全、李忠綽、申駱峯、李復古諸說是也。宣祖乙酉以後、設校正廳、集經術之士、論定諺吐、累歲而成。……自此以後、諸家訓解皆廢矣」とある。

った。

重ねて強調するが、儒教経書の口訣は、その目的自体が経書の学習と教育、そしてそれに対する評価の基準を立てることにあった。実際口訣は世子と国王の経書学習の場である書筵・経筵から、ソウルと地方の儒教教育機関で行われる平常時の経書学習に至るまで、経書学習の道しるべの役割を担った。同時に口訣は、句読と訓釈の正確性をはかる基準として、各種学校試験（日講、句講、月講、春秋考講等）や、過去の講書成績評価に適用された。このように口訣は、教育と選抜の過程で提起される現実的必要という側面から、どの時期を問わず、それなりの標準案を定めなければならなかった。この論文で見てきた高麗末・朝鮮初期の鄭夢周と権近の経書口訣、世宗治世の『小学』および四書口訣、世祖治世の『小学』および四書五経口訣、柳崇祖の七書諺解が、すなわちそのような次元で行われたといい得る。

口訣は、儒教経書を韓国語に訳し、読むため、原文の句読処に韓国語の語助詞を表記することであるが、ハングル創製以前には、不可避だった漢字の音と意味を借りる借字方式を使う他はなかった。ハングル創製以後にも、漢字の画を果敢にも省略して作った口訣字を使ったり、原型そのままの漢字で口訣を付けることもあったが、乙亥字で刊行された『論語大文口訣』や『孟子大文口訣』のように、ハングルで口訣を表記する場合が多かった。また、高麗時代までは、韓国語語順に従い、漢文を遡って読むこともあり、原文の漢字を意味として解釈して読む積読（訓読）口訣が広く活用されたが、朝鮮時代にはいつからかは、漢文の語順構造をそのままにして、原文の句読処に韓国語語助詞を書き入れる順読（音読）口訣方式が普遍化する。

口訣は、経書学習に驚くべき利便性をもたらした。どんな人も当時の学生たちが口訣のために師匠を探して学ぼうとしないと嘆くほど、口訣は経書学習に効果が大きかった。しかし世宗治世の孟思誠から宣祖治世の盧守愼に至るまで、多くの学者たちが絶え間なく反対意見を表明したのを見ると、口訣が持ってきた学習の利便性と効果の裏面では、看過できない教育上の問題点もまた存在していた。その中の一つは、口訣が文字一つ一つの音と意味、口訣一つ一つの吐に硬直して適用されることで、猥瑣を越えて経書の学習を枝葉末節に偏らせる危険性を持っていたという点だ。口訣に執着することは、理を深く問い詰めて心で体得し、自ら実践することを目標とする性理学の勉強とは程遠いと言える。また別の問題は、口訣がある一つの説を標準に制度化することによって、経書解釈の自由と多様性を否定することである。広く意見を求め折衝して妥当な解

釈を追求しつつ、経書解釈の水準を全般的に引き上げる長所もある。しかし一つの解釈が標準となることで、残りの解釈の可能性が封鎖され、既に存在している多様な解釈が廃止される他ない問題点は、依然として残る。このような理由で、絶えることなく経書に対する口訣が推進されつつも、これに対する批判と警戒の声が続いたのだ。

それにもかかわらず、儒教経書への口訣は、経書の学習と教育、評価に適用する公的基準を作る意味を持っていたため、国家次元で当代最高の学者たちを動員し、どうしても推進せねばならない事業であった。実際高麗末・朝鮮初期の鄭夢周と権近を始めとして、金汝、金鉤、崔恒、丘從直、金禮蒙、鄭自英、柳崇祖など、朝鮮前期の儒教経書口訣に参加した多くの人たちは、その時代を代表する学者たちだった。この人たちが自分自身と時代の限界を少しずつ克服し、儒教経書の性理学的観点の理解水準を漸次高めたことによって、退溪と栗谷に至る朝鮮性理学が花を咲かせ、ついに16世紀末と17世紀初めに校正庁によって官本四書諺解と三経諺解を完成させることができた。ハンゲルという優れた文字化手段とともに、朝鮮性理学の成熟という与件が整うことで、儒教経書に対する性理学観点の韓国語解釈をついに一段落させることができた。官本七書諺解の完成は、朝鮮時代の教育と選抜という面において、以後相当な期間、社会的に信用があって活用しうる経書解釈の標準を備えることができたという大きな歴史的意味を持っている。朝鮮前期に行われた儒教経書口訣は、このような意味ある実を結ぶために、前段階としての自身の役割を果たしたと評価することができる。

参考文献

1. 資料

康寧殿口訣『周易伝義』(国立中央図書館、古1231-88)

通鑑口訣(国立中央図書館、松崖(號)編、尙古朝50-145)

『論語大文口訣』(高麗大学校中央図書館所蔵、金属活字本(乙亥字)、校書館、監査年未詳)
<http://library.korea.ac.kr/search/detail/RBK000017488031>

『孟子大文口訣』(東国大学校中央図書館所蔵、金属活字本(乙亥字)、監査者・監査年未詳)
<http://lib.dongguk.edu/search/detail/CATTOT000000629042>

『眉巖集』(以下、文集は韓国古典総合データベース db.itkc.or.kr/)

『四佳文集補遺』

『星湖僊説』

『星湖全集』

『順菴集』

- 『五洲衍文長箋散稿』
『太虚亭集』
『高麗史』(国史編纂委員会韓国史データベース db.history.go.kr/)
『太宗実録』
『世宗実録』
『世祖実録』
『成宗実録』
『中宗実録』
『哲宗実録』(以上、朝鮮王朝実録ホームページ sillok.history.go.kr)

2. 論文

- 金起賢「柳崇祖の道學と思想史的位相」退溪学研究院『退溪学報』第109集、2001年。
金武峰「朝鮮前期諺解事業の現況と社会文化的意義」東岳語文学会『東岳語文学』第58集、2012年。
キム・ジョンウ「吏読、郷札、口訣は翻訳か?」韓国通翻訳教育学会『通翻訳教育研究』2008年。
金鍾錫「道統論に隠れた朝鮮中期の儒学者真一齋、柳崇祖」『国学研究』19、2011年(2011a)。
金鍾錫(2011b)、「真一齋、柳崇祖の性理説に関する分析的考察」嶺南大学校民族文化研究所『民族文化論叢』49、2011年(2011b)。
金恒洙「16世紀経書諺解の思想史的考察」ソウル大学校奎章閣韓国学研究院『奎章閣』10号、1987年。
朴鐘培「薛聰の积読口訣と韓国古代の儒学教育」韓国教育史学会『韓国教育史学』第40巻第3号、2018年。
朴鐘培「四書中心儒學教育課程の性理学とその意義」韓国教育史学会『韓国教育史学』第27巻第2号、2005年。
ソ・ミンジョン「朝鮮時代の翻訳表記についての研究」釜山大学校人文学研究所『コギト』(72)、2012年。
安秉禧「諺解の史的考察」韓国古典翻訳院『民族文化』11集、1985年。
安秉禧「世祖朝の経書口訣について」ソウル大学校奎章閣韓国学研究院『奎章閣』7号、1983年。
安秉禧「中世語の口訣記事資料について」ソウル大学校『奎章閣』1号、1976年。
オク・ヨンジョン『17世紀四書諺解についての総合的研究』書誌学会『書誌学研究』32集、2005年。
李玲景「七書の諺解とその国語史的意義」韓国国学振興院『国学研究』19、2011年。
李聆昊、ハン・ヨンギョ「朝鮮中期経書諺解の成立とその意味」韓国陽明学会『陽明学』第32号、2012年。
張景俊「积読口訣の翻訳史的意義についての試論」韓国翻訳学会『翻訳研究』12巻4号、2011年。
張東宇訳『国訳 真一齋先生文集』韓国国学振興院、2015年。
全在東「四書大全の受容とその意味」東洋礼学会『東洋礼学』第20集、2008年。
鄭在永、アン・デヒョン、ハ・ジョンズ「朝鮮初期积読口訣の発見とその意味」口訣学会

『口訣学会学術大会発表論文集』2016年。

3. その他

韓国民族文化大百科辞典 (encykorea.aks.ac.kr/)

訳出に当たっては、沈元燮 前獨協大学特任教授、金龍 韓国教員大学教授、ソウル大学校師範大学教育学科大学院生 藤田忠義氏の多大な助力を得た。